場所句倒置構文とボックス理論

佐藤　亮輔

1. はじめに

場所句倒置(Locative Inversion)構文については、その統語的振る舞いだけでなく、束縛の事実についても活発に議論されてきた。本発表では、統語部門と意味のインターフェイスに課される条件を探究する 1 つの事例として、Chomsky (to appear)によるボックス理論(Box Theory)に基づき、場所句倒置構文に見られる作用域関係と変項束縛の事実について説明を与えた。

2. 提案

ボックス理論では、従来、コピーと考えられていたものと PRO と考えられていたものは、ともに内的併合によって形成される。従来のコピーの場合、内的併合された要素は内的併合適用先で「ボックス(box)」に格納され、θ 役(θ-role)が付与されず、内的併合適用元でコピーとして解釈される。一方、従来の PRO の場合、ボックスに格納されなかった要素は θ 役が付与されるため、内的併合適用先と適用元の両方で θ 役を受け取り、適用元の要素は PRO として解釈される。なお、ボックスに格納された要素は、以降の統語操作の適用対象外となるが、ボックス内の要素はインターフェイスで解釈可能である。また、IP 指定部にも述語から何らかの θ 役が付与される場合があると考えられている。そのため、本発表では seem などの特殊な動詞が用いられた場合を除いて、IP 指定部にも θ 役が付与されると仮定する。

Culicover and Levine (2001)の構造に基づくと、非能格動詞を用いた場合と非対格動詞を用いた場合の場所句倒置構文はそれぞれ(1)と(2)のような表示を持つ。量化子は網掛けの位置で解釈される。

(1)　$[_{CP}\ C\ [_{IP}\ PP_i\ [_{I'}\ I\ [_{vP}\ v\ [_{RootP}\ \ DP\ [_{Root'}\ Root\ \ \cancel{PP_i}]]]]]]$

↑ θ 役付与、解釈　↑ θ 役付与、解釈　↑ θ 役付与、PRO として解釈

(1)では、PP は最初に外的併合された位置と内的併合先である IP 指定部から θ 役を付与されるため、最初に外的併合された位置では PRO として解釈される。DP には内的併合が適用されず、外的併合された位置でそのまま解釈される。

(2)　$[_{CP}\ PP_i\ [_{C'}\ C\ [_{IP}\ [_{IP}\ DP_j\ [_{I'}\ I\ [_{vP}\ v\ [_{RootP}\ \ DP_j$

↑ 解釈　↑ θ 役付与、コピーとして解釈　↑ θ 役付与、PRO として解釈

$[_{Root'}\ Root\ PP_i]]]]]$　　$DP_j]]]$

↑ θ 役付与、コピーとして解釈　↑ 解釈

(2)では、PP は最初に外的併合された位置で θ 役を付与されるが、内的併合先である CP 指定部では θ 役を付与されない。そのため、最初に外的併合された位置で PP はコピーとして解釈される。一方、DP は最初に外的併合された位置と内的併合される inner-IP 指定部で θ 役を付与されるため、最初に外的併合された位置では PRO として解釈される。なお、最後に右方移動された位置ではそのまま解釈される。

3. 分析

本提案に基づくと、2 つの量化表現が現れた場合、非能格動詞を用いた場合には多義性が生じるが、非対格動詞を用いた場合には表層語順の解釈のみが生じるという次の事実を説明できる。

(3)　非対格動詞を用いた場合

a.　At some factory arrived every employee.　(some > every, *every > some)

b.　In a harbor appeared every battleship.　(a > every, *every > a)

(4)　非能格動詞を用いた場合

a.　Into some nest hopped every rabbit.　(some > every, every > some)

b.　In a department store smiles every clerk.　(a > every, every > a)

例えば(3a)と(4a)はそれぞれ(5)と(6)の表示を持つ。

(5)　[$_{CP}$ C [$_{IP}$ [$_{PP2}$ At some factory]$_i$ [$_{I'}$ I [$_{vP}$ [$_{v}$ arrived]

↑

θ 役付与、解釈

[$_{RootP}$ [$_{DP}$ every empolyee] [$_{Root'}$ ~~[$_{Root}$ arrived]~~[$_{PP1}$ ~~at some factory~~]$_i$]]]]]]

↑　　↑

θ 役付与、解釈　　θ 役付与、PRO として解釈

(6)　[$_{CP}$ [$_{PP2}$ Into some nest]$_i$ [$_{C'}$ C

↑

解釈

[$_{IP}$ [$_{IP}$ ~~[$_{DP2}$ every rabbit]~~$_j$ [$_{I'}$ I　　[$_{vP}$ v [$_{RootP}$ ~~[$_{DP1}$ every rabbit]~~$_j$

↑　　↑

θ 役付与、コピーとして解釈　　θ 役付与、PRO として解釈

[$_{Root'}$ Root ~~[$_{PP1}$ into some nest]~~$_i$]]]]]　　[$_{DP3}$ every rabbit]$_j$]]]

↑　　↑

θ 役付与、コピーとして解釈　　解釈

(5)では、元位置の PP1 は PRO として解釈される。そのため、量化子が量化子として解釈可能なのは IP 指定部に位置する PP2 である。また、DP は元位置で量化子として解釈される。そのため、(3a)では some > every の解釈のみが可能である。(6)では、元位置の PP1 はコピーとして解釈され、内的併合適用先の PP2 はそのまま解釈される。DP については、元位置の DP1 は PRO として解釈されるが、内的併合適用先の DP2 はコピーとして解釈され、DP3 はそのまま解釈される。CP 指定部の PP2 と inner-IP 指定部の DP2、outer-IP 指定部の DP3、Root 補部の PP1 は量化子として解釈されるため、(4a)では多義性が生じる。

本発表では、さらに非対格動詞を用いた場所句倒置構文が非能格動詞を用いた場所句倒置構文および話題化構文と異なり、弱交差(weak crossover, WCO)を示さないことも説明した。また、本分析を拡張して、Takahashi (2010)や Moulton (2009, 2013)などで議論されている、文頭に生起する that 節における束縛現象にも説明を与えた。

4. おわりに

本発表では、統語部門と意味のインターフェイスに課される条件の探究の一環として、場所句倒置構文に見られる作用域関係と変項束縛を取り上げた。本研究の方向性が正しければ、「解釈」と一言に言っても、さまざまな種類の解釈とそれに課される条件が存在することになる。本発表で取り上げたものについて言えば、量化子の作用域関係と束縛条件 C は最終的な表示に基づいて判断され、変項束縛の解釈は派生の途中段階も考慮しながら判断されるようである。言い換えれば、それぞれの現象は同じ統語構造に基づいており、単にその表示を読み取るタイミングが異なるだけであると言えるかもしれない。

参照文献

Chomsky, Noam (to appear) “The Miracle Creed and SMT,” ms., University of Arizona.

Culicover, Peter W. and Robert D. Levine (2001) “Stylistic Inversion in English: A Reconsideration,” *NLLT* 19, 283–310.

Moulton, Keir (2009) *Natural Selection and the Syntax of Clausal Complementation*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Moulton, Keir (2013) “Not Moving Clauses: Connectivity in Clausal Arguments,” *Syntax* 16, 250–291.

Takahashi, Shoichi (2010) “The Hidden Side of Clausal Complements,” *NLLT* 28, 343–380.